

08

未来の科学に一歩近づく
「空飛ぶ車椅子」ができるまで

6月7日(金)、8日(土)

駒場リサーチキャンパス公開 2024

16

開催レポート 8月8日(木)

DO-IT Japan 2024 一般公開シンポジウム

22

開催レポート 9月16日(月祝)

ニューロダイバーシティの源流と展開

特集 1

「空飛ぶ車椅子」と

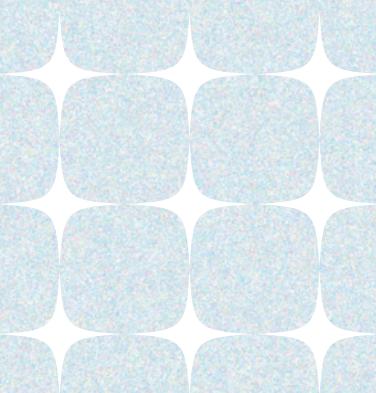
先端研の

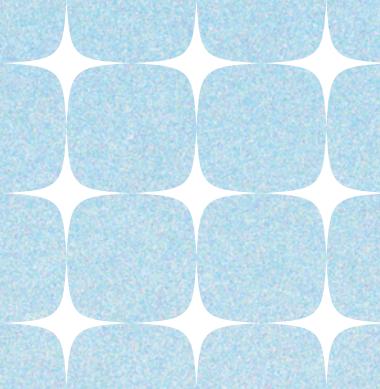
バリアフリー



「空飛ぶ車椅子」の組立初め

hair





未来の科学に一歩近づく 「空飛ぶ車椅子」ができるまで

6月7日金・8日土

駒場リサーチキャンパス公開 2024

Flying Wheelch

2024年6月7・8日（金・土）に開催された「駒場リサーチキャンパス公開2024」（研究所の公開）は、東京大学の駒場リサーチキャンパスにある2研究所、先端科学技術研究所が合同で開催する、研究所の公開イベントです。普段は一般に公開されていない研究室を、関係者だけではなく一般の方々（要事前登録）に向けて公開し、日頃どのような研究をしているのかを発表する機会となっています。

先端研について説明をする際、先端研にはさまざまな分野の研究があり、東京大学のほかの10附置研究所の名前で研究分野がわかる研究所とは一線を画します。たとえば、地震研究所のように、その名前を見れば地震の研究をしていることがすぐにわかるというような法則が通用しません。

では、先端研はどのような研究所なのでしょうか。

先端研の概要を説明する「先端研マスター ブック2024」には、「先端科学技術研究センターは、1987年の設立以来、学術の発展と社会の変化から生じる新たな課題へ挑戦し、新領域を開拓することによって科学技術の発展に貢献することを使命とする研究所です。理工系の先端研究から社会科学やバリアフリーという未来の社会システムに関わる研究まで、



出来上がっていた部分を組み立て始める



羽を部分を組み立てる作業



羽の材料

40以上の研究室が基礎から応用に至る多様な研究を開拓しています。マルチスケールな課題には、柔軟で多層的な『つながり』を実践し、研究分野の垣根を超えて研究者だけでなく研究所全体でサポートして取り組みます。先端研究は、より良い社会と共創未来の実現に向けて、尖った試みを続けていきます」との記述があります。

先端研の研究を大きく分けている6つのカテゴリー「材料」「環境・エネルギー」「情報」「生物医化学」「バリアフリー」「社会科学」の中で、今年度のキャンパス公開2024のキヤッチ

コピーでもある「未来の科学に一步近づく」を象徴するなにかを先端研で製作したいと考えがありました。

この6月に先立つ前年（2023年）の秋に、

岩手県釜石市が主催し、東京大学の4研究所（大气海洋研究所、社会科学研究所、生産技術研究所、先端研）が共催したイベント「海と希望の学園祭 in Kamaishi」では、大气海洋研究所出身でバルーンアーティストの須原三加さんが製作した巨大なバルーンアート「オオヨツハモガニ」が展示されていました。オオヨツハモガニは大气海洋研の大土直哉助教が発見した新種のモガニ類です。

その須原さんの学術的な観点を踏まえ、かつインパクトがありながらも、バルーンという子供から大人にまで親しめる素材を生かしたオブジェで、先端研の「未来の科学に一步近づく」何かを製作してもらいたいと、キャンパス公開や先端研について話をしていました。

その中で、バリアフリー分野の話におよび、先端研のバリアフリーカテゴリーの4つの研

究室の話になりました。

4つの研究室は、学際バリアフリー研究分野、当事者研究分野、インクルーシブデザインラボラトリ、社会包摂システム分野です。

だ。人は見えなくて聞こえなくても、『ことば』があれば生きていける。生涯をかけて、そのことを私は実証実験している」と書きます。

障害者の視点で人と社会のバリアフリー化を研究する**学際バリアフリー分野 福島智特任教授**

は「先端研マスター ブック2024」のコラムで「あなたが『こんにちは』と言つてから私が『こんにちは』と答えるまでに、2、3秒のタイムラグがある。それはまるで、私が月面にいて、あなたと無線で対話する時のような感じかもしれない。地球と月の平均距離は、約38万キロ。無線通信に使う電波は、光速と同じだから、単純計算で、往復2秒半くらいはかかる。実際の

私はもちろん、月面にはいなけれど、地球の夜の側の宇宙空間のような世界、つまり、暗くて無音の認知世界に生きている。私が目が見えなくて、耳が聞こえない、完全な盲ろう者だからだ。そんな状態にいる私とどうやって対話するのか？私が主に使っているのは、「**指点字**」を用いて通訳してもらうという方法である。指点字は、点字の6つの点の組み合わせと左右3本ずつの手の指を対応させた触覚的な会話法

リテーションと検証をする**当事者研究分野 熊谷晋一郎教授**は同ブックのコラムで「私は生まれつき、脳性まひという障害をもつており、電動車いすに乗つて生活しています。小児科の臨床医として仕事をしたあとに、当事者研究をテーマに研究活動を始めました。様々な当事者の経験やニーズを起点に、学際的な研究を立ち上げる当事者研究は、驚きと希望、そしてユーモアに満ちています」と述べています。

インクルーシブな科学教育環境の構築を研究するインクルーシブデザインラボラトリ

並木重宏准教授の言葉は「ポスドクのころに神経系の難病で歩けなくなり、一度研究をあきらめました。いろいろな縁があり、今まで大学で研究をしていますが、もう一度研究をやってみようと思えたのは、世の中には障害のある研究者が確かな数いること、いくつかの国では障害のある研究者を歓迎する文化や



車輪を装着するバルーン製作スタッフたち

制度があることを知ったからです。研究上での私の困難は、実験室環境のバリアにあります。実験室のデザインに、障害のある人の事が想定されていないことが原因のひとつです。この課題は他の人たち、例えば障害のある学生や、病気や中途障害のある人、高齢者にも共通するものです。学内外のいろいろな立場の方と協力して、障害など、制約の大きな人が使えるデザインを考える『インクルーシブデザイン』のアプローチで、大学の実験室環境のバリアフリー化に取り組んでいます。この場所を活用して、障害のある生徒へ科学の研究体験を提供していく予定です。障害のある人のＳＴＥＭ分野への参加を拡大するという世界の流れを、日本でも実現していきたいと思います」と同ブックに掲載されています。

学び・働きに困難のある人々を包摂する新しい社会システムを創造する**社会包摂システム分野**近藤武夫教授は同ブックのコラムに以下のよう書いています。「学校社会や労働社会には、障害等の特性や何らかの背景のある人々の参加を阻む様々な社会的障壁があります。人間にとつて、学びたいという気持ち、働きたいという気持ちちは、ごく自然なものです。もちろん、学ぶことや働くことは、個人の権利として尊重されるべきものであって、全員がこうあるべきだと誰かに強制されるもので



完成した「空飛ぶ車椅子」

はありません。しかし、学びたいと思った時に、学びたいと望んだ場所で、学びたいことを学べる社会、そうすることをすごく自然に選ぶことができる社会は、人間社会の文化的な到達点の一つだと考えています（働くことも同様です）。学び働く機会から取り残された人々の包摶を考える上で、『障害』という物事の捉え方の切り口や、包摶を可能とするテクノロジー活用の考え方を大切にしつつ、インクルーシブな社会とはどのようなものかについて日々考え、実践しています。」

その車椅子のテーマについて、広報広聴・情報支援室長であり、身体情報学分野の稻見昌彦教授から「空飛ぶ車椅子」とするのはどうだろうかという提案がありました。そうすることでの、車椅子を使用する人に限らない、車椅子を必要としない人も憧れる乗り物になりうる可能性を示唆し、かつキャンパス公開のキヤッヂコピーである「未来の科学に一歩近づく」というテーマを具現できる機会になるだろうというアドバイスが寄せられました。



こうして、キャンパス公開の当日朝、先端研の3号館1階から中2階にかけてある大階段に巨大なバルーンオブジェ「空飛ぶ車椅子」が現れました。

今を生きる私たち人間の課題は、マイノリティであることマジョリティであることに関わらず山積しています。時に絶望的な気持ちが襲いかかり、自分の非力を嘆くことも少なくありません。

先端研のバリアフリーカテゴリーだけでなく、すべての研究が、人々の生きる日々の限界をも超えて、どこまでも進んでいける希望を作り出す「未来の科学に一歩近づく」その源流にあるという決意、またありますようにとう願いを込めて、「空飛ぶ車椅子」は2日間その姿を見せ続けました。（写真はバルーン製作の過程の一部です。）

この4つのバリアフリー研究が、研究者としてのバックグラウンドもある須原さんの心を

Diversity,
Opportunities,
Networking
and
Technology

開催レポート 8月8日木

DO-IT Japan 2024

一般公開シンポジウム

テーマ：

「高校（後期中等教育）のインクルーシブ教育を語る
～高校入試・高校・大学入試における課題」

近藤武夫教授（DO-IT Japan ディレクター）の挨拶

2024年8月8日、東京大学先端科学技術研究センターのENEOSホールにて【DO-IT Japan 2024 一般公開シンポジウム】がハイブリッドで開催されました。冒頭の挨拶で、近藤武夫教授（DO-IT Japanディレクター）は、参加者人數について、会場・オンライン含め550人と、今回のテーマ「高校（後期中等教育）のインクルーシブ教育を語る」高校入試・高校・大学入試における課題」への関心の高さを感じさせると述べました。

2007年のスタート時点から「この夏の1週間の大学を体験して、自分らしい生活の仕方、それからテクノロジー活用を学ぶ」という集中的な学びのサマースタディの期間、またそれ以外の期間も毎月オンラインでの交流を長く続けてきたので、コロナ禍でのオンラインへの移行というのはそれほど大変なことはなかった経緯を述べながら、近藤ディレクターは、2023年からの現地開催復帰について、また今年度の一般公開シンポジウムを夏の期間中に同時に開催するということでおぼコロナ前の状態まで戻つてることができているという状態を報告しました。

その中で、参加者の一部の人たちは、「直

接新しい人々と出会って、多くの考え方方に触れていくということは非常に重要である」という声があること、「主催側もそうした出会いの機会があるということは本当に重要なことだと思っている」ことを率直に語りかけました。

続けて、近藤教授は「この高校のインクルージョン、小学校、それから中学校義務教育段階のインクルーシブ教育というのは少しずつ進展してきているところでもありますし、それから大学の大学教育のインクルージョン、それから雇用のインクルージョン、こういったところには様々な進展の確保を見られていくところです。

一方、初等教育と高等教育、就労の間にある中等教育のところでは、その前後に入試など、それから様々な教育体制の変化を挟んでいる関係から、どうしてもこのインクルージョンについての課題が残っているというのは皆さんもご承知のところかと思います。

その意味でDO-IT Japanの中では、この中等教育のインクルージョンをもう数年ですね、テーマに掲げてこの一般公開シンポジウムの題材としてきております。今年はさらに、中学校だけではなくて、高校を特に重点的に話題を絞ったシンポジウムを開催することといたしました」と挨拶を結びました。

DO-IT* Japanとは

DO-IT Japanは、障害や病気のある若者や子どもたちの高等教育への進学とその後のキャリアへの移行支援を通じたリーダー育成プロジェクトです。東京大学先端科学技術研究センター、共催企業・協力企業との产学



活動紹介をするDO-IT JAPAN事務局の脇山さん

*DO-IT = Diversity, Opportunities, Internetworking, and Technology



冒頭にあいさつを述べる近藤武夫教授

特に、通級指導（通常の学級に所属しつつ、特定の教科や時間帯に個別に支援を受ける制度）の充実や、ICT（情報通信技術）を活用した合理的配慮の促進が現在取り組まれており、特別支援学校のセンター的機能（支援の専門性を持った学校が他の学校を支援する役割）を強化する計画も紹介されました。担当者は、特別支援教育の重要性について、「日本の学校教育は高い成果を上げているが、同

連携により、2007年から活動を続けています。DO-IT Japanでは、テクノロジーを活用して自分の特性に最適化した学び方を体験すること、大学に進学した後のキャンパスライフと自立生活を体験すること、インターンシップや海外研修への参加、オンライン・オフライン両方で行われるDO-ITコミュニティへの継続的な参加など、多様な機会提供を行なっています。こうした機会を通じて、多様な価値観を持つ大人たちや同世代の仲間たちとの交流や情報交換を行っています。これららの経験から、障害や病気のある若者は、自分に合った学び方・働き方・生活の仕方を試行錯誤するほか、障害の社会モデル、自己決定、セルフアドボカシー（自己権利擁護）などの考え方を学ぶことに加えて、将来の

オフライン両方で行われるDO-ITコミュニティへの継続的な参加など、多様な機会提供を行なっています。こうした機会を通じて、多様な価値観を持つ大人たちや同世代の仲間たちとの交流や情報交換を行っています。これららの経験から、障害や病気のある若者は、自分に合った学び方・働き方・生活の仕方を

試行錯誤するほか、障害の社会モデル、自己決定、セルフアドボカシー（自己権利擁護）などの考え方を学ぶことに加えて、将来の

夢の実現や、社会活躍とリーダーシップに関する学びの機会を得ることができます。DO-IT Japanは、プログラムに参加した若者の中から、社会で活躍するリーダーが育つことを願い、活動を続けています。

【DO-IT Japan 2024】 一般公開シンポジウム

第1部

シンポジウムでは、中等教育後期（高校）でのインクルーシブ教育を実現するまでの障壁とその解消をテーマとした議論を行いました。

第1部では、DO-IT Japan事務局の脇

山輝衣菜さんより活動紹介が行われ、続いて文部科学省、大学入試センターより現在の取り組みについての紹介がありました。第2部

文部科学省からの話題提供「学校教育におけるインクルーシブ教育の現状と今後の方向性について」

文部科学省の担当者は、現代の高校教育において「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現することの重要性と、障害の有無にかかわらず全ての生徒が自分に合った学びを受けることができる環境を整えることが目標と話しました。

では障害のある学生「スカラ」（肢体不自由、学習障害のある学生たち）より高校入試、高校生活、大学入試の経験を振り返っての話題提供がありました。その後、話題提供スカラと、インクルーシブとはなにか、どのような取り組みが必要だったのかを議論しました。



質問に答える登壇者たち

れる）に伴い、すべての学校においてこの取り組みが行われることについて、地域や学校によって対応に格差があることが課題として挙げられました。それを改善するための研修や情報共有の強化が今後の焦点となると話をしあくくりました。

大学入試センターからの話題提供と 障害のある受験生に対する受験上の 配慮について

大学入試センターからの話題提供では、障害

のある受験生に対する受験上の配慮について詳しい説明がありました。具体的には、大学入学共通テストにおける配慮事項について、申請手続きの流れ、そしてどのような配慮が実際に行われているかが紹介されました。

例えば、視覚障害や聴覚障害、発達障害などの障害を持つ受験生には、試験時間の延長、別室受験、筆記試験の代筆や音声教材の使用などが認められるなど、個々の症状や状態に基づいて慎重に審査される事実について述べられました。

調圧力が強く、個々の多様なニーズに応じた対応が不足している」と指摘し、これを打開するためには、教育の個別化と協働学習のバランスを重視し、障害のある生徒が他の生徒と共に学びながらも、その特性に合った支援を受けられる体制が必要だと述べました。

さらに、合理的配慮の法的義務化（障害者差別解消法に基づき、合理的配慮が義務づけら

申請にあたって必要となる診断書や報告書の内容が具体的に説明され、申請プロセスにおける詳細なガイドラインも提供されました。

さらに、技術的支援についても触れられ、聴覚障害者向けに補聴援助システムの導入や、タブレットを使用して問題を拡大表示するなど、最新の技術を活用した支援が試験場でも提供されていることも伝えられました。しかし、これらの対応にも地域格差があることが問題視されており、今後の改善が期待されることも指摘されました。

質疑応答セッション

教員研修の必要性

教員の中には、合理的配慮や障害者差別解消法に基づく対応について十分な理解が不足している場合があり、それが障害のある生徒への適切な対応を妨げているという指摘がありました。文部科学省の担当者は、教員研修の充実が今後の大きな課題であると認識しており、特別支援教育総合研究所が提供する研修教材やeラーニングプログラムを活用して、教員の専門性向上に取り組むと述べました。

医療的ケアへの対応

医療的ケアを必要とす

る生徒の増加に対する対応についても講論されましたが、特に、地方自治体ごとに対応が異なることが課題となつております。文部科学省は先進的な取り組みを行つておる事例を全国に共有することを検討していることも述べられました。また、看護師の配置などに関する予算的なサポートも行われております。今後さらに対応を強化する方針が示されました。

地域格差の解消

地域格差の解消 地域によって受験上の配慮や教育支援の質に大きな差があることが問題視されました。特に、地方ではテクノロジーを活用した支援が十分に行われていないことが指摘され、これを解消するための取り組みが求められていることが認識されました。文部科学省の担当者は、テクノロジーの活用を広めるための研修を強化し、全国的な均等な支援を目指すことが解決の一端となると回答しました。

第2部

慎さんと堀口さん、2名のスカラーカーからの話題提供・質疑応答、「ディスカッション

第2部では、慎さんと堀口さん、2名のスカラーラーからの話題提供がありました。

メディア掲載が多数ある慎さんは、厚生労働省指定難病の先天性疾患・脊髄性筋萎縮症に

より24時間の介護が必要です。2013年度スカラーアで、東京大学文学部卒後、同大学院人文社会系研究科・修士課程に在学し、ジャック・ルソーおよび18世紀フランス思想を現在研究しています。

24時間介護が必要であるということは24時間人がそばにいるという当たり前の現実、ルソーの研究のための重い書籍を持ち上げる力もないので研究をすることにも人の手を借りる必要があること、介護者も「人」であるので様々な個性があること、そうした日常を語る慎さの言葉からは「日常」＝当たり前のこと、について深く考えさせられる何かが秘められていました。

2017年度スカラーアの堀口さんは、読み書き困難があり、パソコンの読み上げを用いて大学院を受験し、現在、筑波大学大学院・修士課程に在籍中です。高校在学時から学校へ合理的配慮の相談を行い、自分に合ったICTの活用の仕方を段階ごとに模索しながら高校から、大学、大学院へと進学しました。高校時代に合理的配慮の相談をする際に、自分の感じていることをどうやつたらそうではない人に伝えられるのか、その不安な気持ちを伝える勇気を持つことの大切さを学びました

れぞれに「違うこと」が「効率が重視され競争の激しい社会」では認められるのが難しいことが多いのも実情です。

プログラム

「闇合」

【第1部】

- | 13時から14時20分／挨拶・DO-IT Japan紹介、話題提供 | |
|-----------------------------------|---------------------------------------|
| 13:00-13:05 | ディレクター挨拶 近藤武夫（DO-IT Japanディレクター） |
| 13:05-13:10 | 本日の流れ・問題提起 近藤武夫（DO-IT Japanディレクター） |
| 13:10-13:20 | DO-IT Japan活動紹介 脇山輝衣菜（DO-IT Japan事務局） |
| 13:20-13:40 | 文部科学省より話題提供 |
| 13:40-14:00 | 大学入試センターより話題提供 |
| 14:00-14:20 | 質疑応答 |

【第2部】

14時40分から16時／話題提供・質疑応答、ディスカッション

- 14:40-15:00 スカラーからの話題提供（2名、各自10分）
15:00-15:20 質疑応答
15:20-15:35 話題提供スカラーとのディスカッション
15:35-15:55 フロアディスカッション
15:55-16:00 閉会の挨拶



開催レポート 9月16日 月・祝

ニューロダイバーシティの 源流と展開

The Origins and
of Neurodiverse

2024年9月16日（月・祝）に、国際シンポジウム「ニューロダイバーシティの源流と展開」が東京大学多様性包摂共創センター（以下、先端研）の共催により、先端研のENEOSホールにてハイブリット形式で開催されました。

このシンポジウムは「ニューロダイバーシティ（神経多様性）」という言葉が生まれた背景と、その後の運動の背景や研究の展開を国際的な視点から振り返ることがテーマとなっていました。

1990年代以降に生まれたオンラインコミュニケーションのなかで、複数の自閉症者たちによって産み出された「ニューロダイバーシティ（神経多様性）」という概念は、日本でも徐々に広がりを見せています。この概念は、マジョリティ向けの社会への一方向的な適応を強いる個人モデル的なパラダイムを批判する自己権利擁護運動の文脈のなかで誕生しました。しかし近年、この言葉が、埋もれていた異能人材（Human Resource）を表象するものとして使用されることが増え、その背景にあつた人権（Human Rights）の視点が後景に退きがちです。

シンポジウムの第1部では、フィンランド、オランダ、韓国、チリ、日本から、ニューロダイバーシティ運動や参加型自閉症研究／自閉症当事者研究の実践家を招き、ニューロダイバーシティという言葉が生まれた背景と、その後の運動や研究の展開を概観しました。

第2部では、日本の福祉、建築・都市計画、教育、企業、医療といったさまざまな領域において、ニューロダイバーシティの概念がどのように受容され、実践されているかが紹介されました。

それらを踏まえて第3部では、今後取り組むべき課題について全体討論を行いました。

具体的には、ニューロダイバーシティという言葉を、生産性や人材と言った文脈だけに偏つて理解するのではなく、人権という文脈で理解することの重要性が確認されるとともに、科学的研究と実践との協働のあり方やその受け止めについての国際比較にもとづき、立法院への当事者参加がもたらす可能性などが議論されました。





プログラム

【開会】

14:00-14:05 開会の挨拶
笠井 清登教授（東京大学大学院医学系研究科）

第一部：当事者からみるニューロダイバーシティ

14:05-14:25 EUCAP および GATFAR における神経多様性、障害、および自閉症に関する議論
Heta Pukki 氏（European Council of Autistic People）

14:25-14:45 ニューロダイバーシティの起源とオートスケープ
Martijn Dekker 氏（Autscape Organisation）

14:45-15:05 日本の自閉症者による当事者研究実践の紹介
綾屋 紗月特任准教授（東京大学先端科学技術研究センター／おとえもじて）

15:05-15:25 東アジア自閉症者の権利とニューロダイバーシティの実践：ウェブカルチャーというメディアを使って
尹 恩鎬氏（estas, Adult Autistic Self-Advocacy Meeting）

15:25-15:45 チリ流の自閉症：自閉症者が神経多様性の可視化をどのように促進するか
Francisco Pizarro Olivares 氏（チリカトリック大学インクルーシブ技術開発センター）

15:45-15:55 休憩

第二部：日本におけるニューロダイバーシティの受容

15:55-16:10 日本の発達障害者支援現場でのニューロ・ダイバーシティの受け止め
日詰 正文氏（国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 研究部／一般社団法人日本発達障害ネットワーク）

16:10-16:25 空港利用にみる発達障害者などの不安と安心の所在
丹羽 菜生 機構准教授（中央大学研究開発機構）

16:25-16:40 日本の教育におけるニューロダイバーシティの受容～「インクルーシブ教育」の実現に向けた議論の現在地～
竹内 健太氏（参議院文教科学委員会調査室）

16:40-16:55 発達障害のある社員の採用、定着、活躍
安井 直子氏（三井化学株式会社人事部DE&Iグループ）

16:55-17:10 日本のニューロダイバーシティー、自閉症支援からみる違和感
内山 登紀夫教授（福島学院大学／よこはま発達クリニック／親と子のサポートセンターふくしま）

17:10-17:20 休憩

第三部：パネルディスカッション

17:20-17:55 パネルディスカッション

17:55-18:00 閉会の挨拶
伊藤 たかね特任教授（東京大学多様性包摂共創センター）

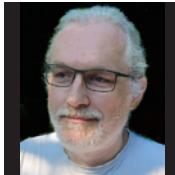
PROFILE

**Heta Pukki**

ヘルシンキ大学で生物学の修士号、バーミンガム大学で教育学の修士号を取得。成人の自閉症支援を専門とし、エンパワーメントに焦点を当てている。Erasmus+プロジェクト「Digital for All」のプロジェクトコーディネーターとして障害者向けのデジタルスキル教育を推進。また、NGO Autistic Spectrum Finlandの理事長であり、欧洲自閉症者協議会(EUCAP)の会長を務め、欧洲全域の自閉症者の権利を擁護している。また Global Autistic Task Force on Autism Research (GATFAR) を率いている。

**日詰 正文**

日本発達障害ネットワーク副理事長・事務局長、国立重度知的障害者総合施設のぞみの園研究部長。言語聴覚士。長野県精神保健福祉センター・長野県健康福祉部健康長寿課、厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部 発達障害対策専門官を経て現職。

**Martijn Dekker**

1990年代に、自閉症者のための最初のグローバルオンラインコミュニティのひとつであるIndependent Living on the Autistic Spectrum(Inv)を設立し、そこでニューロダイバーシティの概念が生まれた。長期間にわたり Autscape Organisationの議長を務め、現在は副議長を務めている。毎年開催される Autscape Conference の運営に継続的に参加している。最近の研究では、Inv内でニューロダイバーシティの概念がどのように共同製作されたかに焦点を当てている。

**丹羽 菜生**

一級建築士、工学博士。早稲田大学卒業後、BASSTRONAUTICS ADMINISTRATIONを主宰。中央大学の准教授としてユニバーサルデザインやインクルーシブデザインの研究を行っている。2022年から、日本航空や羽田空港と協力して、気づかれにくい障害者などのための搭乗体験会を実施している。

**綾屋 紗月**

東京大学先端科学技術研究センターおよび多様性包摂共創センターの特任准教授。2011年にニューロダイバージェントな人々による当事者研究会「おとえもじて」を設立。2020年に東京大学で博士号を取得し、自閉症者とマジョリティとの相互作用に焦点を当てた研究を行っている。

**竹内 健太**

2016年から参議院文教科学委員会調査室の調査員。政治学および学術の修士号を取得。本シンポジウムに関連する著作として、特別支援教育の現状と課題やインクルーシブ教育の実現に向けた日本の特別支援教育の現状に関する論文を出版している。

**尹 恩鎬**

仁川国立大学日本学研究所の上級研究員。仁荷大学で文化マネジメントの博士号および修士号を取得。日本の文化、特にアニメ、ウェブ小説、オタク文化、コンテンツツーリズムの研究に従事。2019年から2022年まで仁荷大学の客員教授として文化コンテンツやメディア研究を教えた。さらに、ジャーナリストや研究員としても活動してきた。

**安井 直子**

三井化学株式会社人事部DE&Iグループ グループリーダー。大卒後、大卒後当時の三井東圧化学に“大卒女性研究者枠”（職種限定地域限定職）で入社。新農薬探索業務に従事。1997年に会社の合併に伴い新人事制度が導入され総合職に。その後、農薬の安全性研究、開発、研究管理、経営企画と農薬事業に関わる業務を経験した。2012年から2年間文部科学省に出向。2015年から現職。

**Francisco Pizarro Olivares**

臨床神経心理学者で、ディエゴ・ポルタレス大学で社会神経科学の修士号を取得。成人および高齢者の神経心理学的評価を専門とし、チリ・カトリック大学(CEDETI UC)およびディエゴ・ポルタレス大学(CENHN UDP)で講師および学術コーディネーターを務めている。チリ臨床神経心理学会の創設メンバーの一人でもある。

**内山 登紀夫**

児童精神科医、よこはま発達グループCEO、福島学院大学副学長、親と子のサポートセンターふくしまセンター長。順天堂大学医学部卒、その後児童精神科、重度知的障害の成人入所施設、大妻女子大学、福島大学、大正大学の勤務を経て現職。その間にノースカロライナ大学TEACCH部、英国Lorna Wing Centreに留学。福島の東京第一原発事故の後、福島沿岸部の親子のメンタルヘルス支援と横浜の発達障害専門のクリニックにて臨床活動を行っている。